

# 「いじめ解決一斉キャンペーン」の実施結果について

## 1 「いじめ解決一斉キャンペーン」の概要

平成22年度より「人権週間」に合わせ、いじめ根絶を目指し、全教職員を対象にしたアンケートによる「いじめ解決一斉キャンペーン」を実施しています。今年度は、全児童生徒を対象としたアンケートも実施しました。

### (1) 実施内容

- ・ いじめや人間関係のトラブルで不安や悩みを抱えた児童生徒を見落とししたり、見逃したりしていないかの点検を、児童生徒を対象にした無記名アンケートと教職員を対象にしたアンケートによる実態把握に基づき行う。
- ・ 把握された「不安や悩みを抱え困っている児童生徒」への対応状況の点検及び検討を行うことで校内支援体制を充実など学校の取組を促し、いじめやトラブルの早期解決を図る。

### (2) 実施期間

- ・ 人権週間（12月4日～12月10日）に合わせて各学校が設定した時期に実施

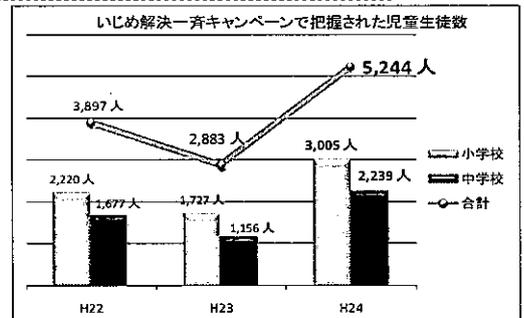
## 2 いじめ解決キャンペーンの実施結果

### (1) いじめ解決一斉キャンペーンで把握された児童生徒数（小中学校）

☆ いじめやトラブル等で不安や悩みを抱えた児童生徒数は、5,244人で2,361人増（81.9%）

今回から、児童生徒対象の無記名アンケートで事前に子どもたちの全体状況を把握し、教職員対象のアンケートを実施したことで、潜在化していたいじめや人間関係のトラブルの把握が進んだと考えられます。

※ 実施時点での解消率は小学校が80.0%、中学校が82.2%です。  
（“解消している”と“一定の解消が図られたが継続支援中”の合計）

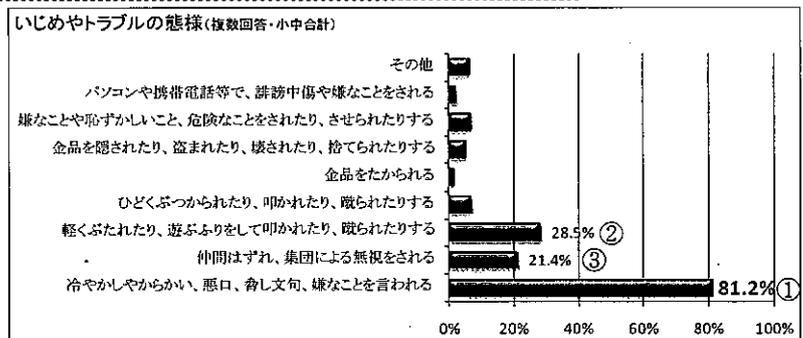


### (2) いじめやトラブルの態様

☆ 「冷やかしかからかい、悪口、脅し文句、嫌なことを言われる」8割以上と圧倒的

- ① 冷やかしかからかい、悪口、脅し文句、嫌なことを言われる
- ② 軽くぶたれたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする
- ③ 「仲間はずれ、集団による無視をされる」

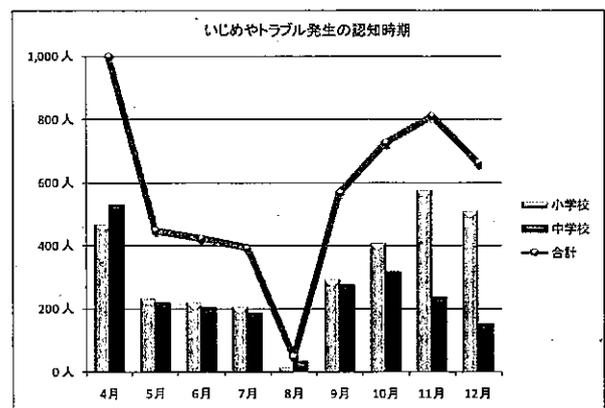
上記三態様の比率が高くなっています。



### (3) いじめやトラブル発生の認知時期

☆ 月別認知時期では、4月と10、11月がピーク

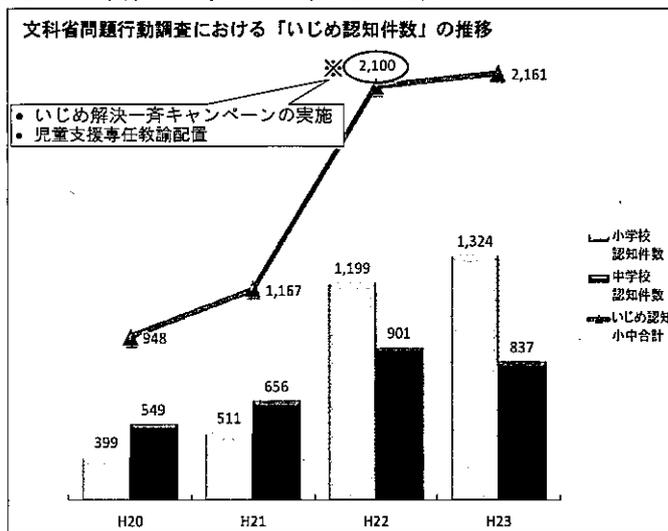
進学・進級後間もない4月と、学校行事等が重なる10月、11月にいじめや人間関係のトラブルの発生が高くなっています。



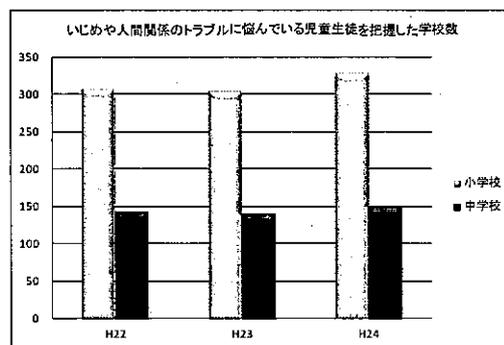
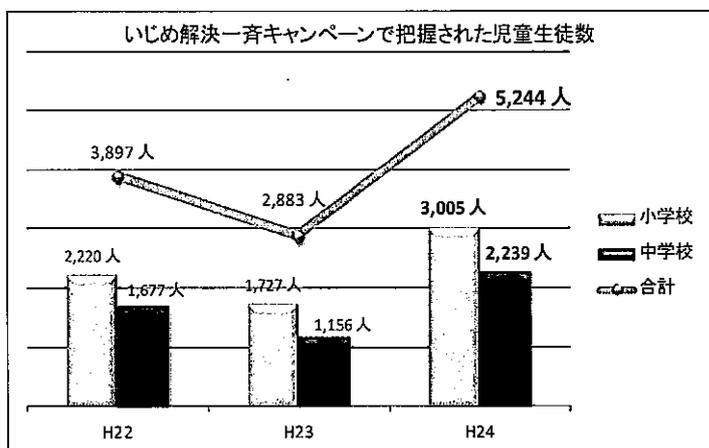
## 「いじめ解決一斉キャンペーン」の結果について

文科省の問題行動調査における「いじめの認知件数」（いじめの定義に基づき認知された数値）の推移をみると、「いじめ解決一斉キャンペーン」が開始された平成 22 年度から大きく増加しています。「いじめ解決一斉キャンペーン」により、いじめ問題への取組の基本である早期発見・早期対応の前提となる実態把握が大きく進んだと言えます。

今年度も、平成 24 年 12 月 4 日から 10 日までの第 64 回人権週間に合わせて「いじめ解決一斉キャンペーン」を実施しました。各学校では、いじめの定義にこだわらず、いじめや人間関係のトラブル等で不安や悩みを抱えている児童生徒を把握し、それに対する支援や対応の状況について点検が行われました。



### 1. 平成 24 年度「いじめ解決一斉キャンペーン」で把握された不安や悩みを抱えている児童生徒数



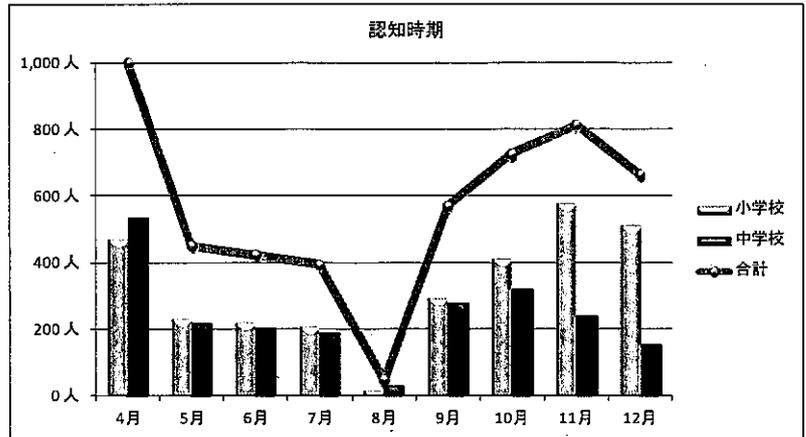
いじめや人間関係のトラブルで不安や悩みを抱えている児童生徒として把握された数は、小学校で 3,005 人、中学校では 2,239 人で合計 5,244 人でした。今年度から、児童生徒を対象にした「無記名アンケート」によるいじめ等の状況把握を新たに行っているため、単純比較はできませんが、平成 23 年度数値から大きく増加しました。（前年度に比べて、小学校で 74% 増、中学校では 94% 増、小中の合計では 81% 増）

いじめや人間関係のトラブルで不安や悩みを抱えている児童生徒を把握した学校数も増加しています。「いじめはどの学校でも起こりうる」問題であることが再確認できるとともに、いじめの有無や多寡にこだわることよりも、いじめの早期発見・早期対応が重要であることが分かります。

調査時点での解消率（“解消している”と“一定の解消が図られたが継続支援中”の合計）は、小学校が 80.0%、中学校では 82.2% です。

## 2. 月別認知時期では、4月と10、11月がピーク

認知時期については、平成22年度、平成23年度とほぼ同様の傾向が表れています。二つの大きなピークがあり、一つ目は小学校も中学校も4月で同じですが、二つ目は小学校では11月、中学校では10月になっています。また、小学校では二つ目の11月がもっとも大きなピークになっているのに対し、中学校では一つ目の4月がもっとも大きなピークになっています。

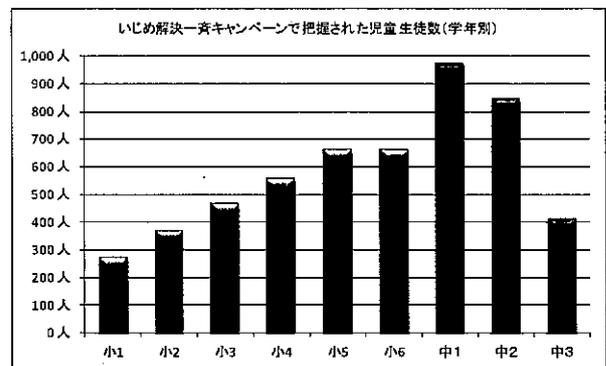


進入学後間もない4月には、できるだけ早期に潤いのある暖かい学級風土の醸成や児童生徒間の人間関係づくりを行うことが大切であると言えます。また、夏休み後は、学校行事等の取組の中で児童生徒間の様々な葛藤が生じ、それがいじめや人間関係のトラブルに発展している可能性があります。教職員にとっても忙しい時期であり、情報共有を図り多面的に児童生徒の行動観察を行うことや、組織的な生徒指導体制の構築が重要と言えます。

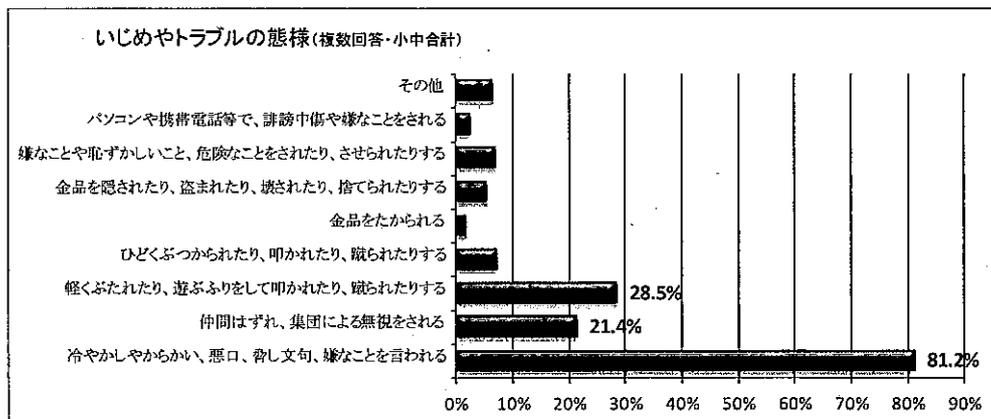
## 3. 学年別では、中学校1年生がピーク

学年別でみると、中学校1年生が最も多く、その次が中学校2年生です。中学校の月別認知時期のピークが4月であることを考え合わせれば、中1の4月が、最も「いじめや人間関係トラブルのリスク」が高いこととなります。

小中連携による小学校から中学校へのスムーズな進学、特に生徒一人ひとりの状況について丁寧に引き継ぎが行われるような配慮が必要と言えます。



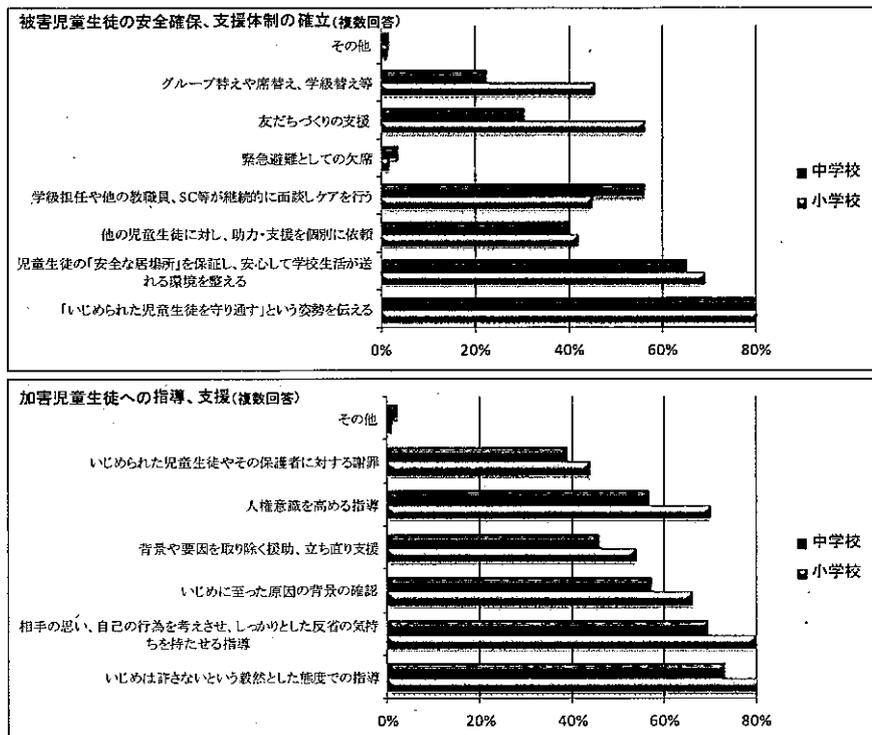
## 4. 「冷やかしかからかい、悪口、脅し文句、嫌なことを言われる」8割以上と圧倒的



いじめやトラブルの態様としては、「冷やかしかからかい、悪口、脅し文句、嫌なことを言われる」が圧倒的に多いことがわかります。「軽くぶたれたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする」、「仲間はずれ、集団による無視をされる」の三つが他の態様と比べて比率が大きく、「単なるふざけ合

い」、「いじられているだけ」などに見落とされる可能性があり、定期的にアンケートや面談を実施するなど実態把握の取組が大切です。

## 5. 被害児童生徒への支援及び加害児童生徒への指導



被害児童生徒への支援では、小学校は人間関係の調整や環境の調整に積極的であり、中学校では、教育相談等を通じてのケアに積極的であると言えます。加害児童生徒への指導では、小・中学校とも「いじめは許されないという毅然とした態度での指導」を行っていることが多いとわかります。

子どもの発達段階に合わせた対応が行われていると考えられますが、今後、協議会等で様々な事例について情報交換を行うなど、より適切な対応や対策について議論を深めることが期待されます。

## 6. まとめ

この取組の結果からも、やはり「いじめはどの学校にも、どの学級にも、どの子どもにも起こりうる」問題であることがわかります。早期発見・早期対応を図るためには、定期的なアンケートや面談などの実態把握の取組や組織的な指導体制の重要性が改めて確認できました。

また、いじめそのものが発生しにくい環境や風土をつくるためには、児童生徒間の人間関係づくりや児童生徒と教職員による信頼関係の構築が大切であり、それが未然防止につながるということが再確認されました。

今後とも、各学校においては、いじめの問題に対する社会的な関心の高まりに左右されるのではなく、目の前の子どもの実態に焦点を絞り、この問題に継続的に取り組むことが求められています。